

Title	「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンとル・コルビュジエの共同性
Author(s)	千代, 章一郎
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 7-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/89271">https://doi.org/10.18910/89271</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンとル・コルビュジェの共同性

千代 章一郎

## キーワード

シャルロット・ペリアン, ル・コルビュジェ, 装備, 身体動作  
Charlotte Perriens, Le Corbusier, Equipmenet, Movement

1. はじめに
2. 「装備」の基本要素
  - 2-1. 椅子の身体応答性
  - 2-2. 卓の重厚性
  - 2-3. 棚の可動性
3. 「装備」の拡張要素
  - 3-1. 照明機器
  - 3-2. 衛生設備
4. おわりに

## 1. はじめに

シャルロット・ペリアン Charlotte Perriand (1903-1999) はフランスの建築家ル・コルビュジェ Le Corbusier (1887-1965) の建築理念を実現した中核的な共同者の一人である。装飾家であると同時に建築家であるという新しい職能の開拓者であり、また近代建築運動における日仏の媒介者でもある。ル・コルビュジェのアトリエにおける所員と共同者の区別を厳密に定義することはできないが、ペリアンとの共同署名をル・コルビュジェが一部の仕事に認めている点において、多くの所員とは異なっている。

ル・コルビュジェは制作理念を自らに帰する一方、造形の出所やアトリエ内外の協力者や共同者について言及することも多い<sup>1</sup>。ただし、ルシオ・コスタやジャン・プルーヴェなどの部外者を除くと、アトリエ内での共同署名は限られている。アトリエを運営し、現場を指揮したピエール・ジャンヌレが筆頭である<sup>2</sup>。

ペリアンはル・コルビュジェのアトリエに1927年に入所して10年後の1937年に退所している。当時ル・コルビュジェは『今日の装飾芸術』(1925)において「新しい装飾」として定義した「装備 équipement」の研究を続けていた。ル・コルビュジェによると、「手足の

---

本稿は、第63回大会(2021年9月12日, オンライン)での発表にもとづく。

ようなオブジェ=型 objet-type」としての「装備」は、「椅子・卓・棚」に還元される<sup>3</sup>。レスブリ・ヌーヴォー館（1925）の室内装飾はその例証であるが、椅子は既製品であり、理念の十分な具体化には至っていない。ル・コルビュジエがペリアンを共同者と認めたのは、この研究を専門的に担うことが期待されたからであった。

10年間のアトリエ在籍時、ペリアンは室内装飾だけではなく、建設事業や都市計画まで少なからず関与した<sup>4</sup>。アトリエ退所後も、ル・コルビュジエ晩年のチューリッヒ展示館（1963）やブラジルのフランス大使館（1964）の構想まで続いている（表1）。

ル・コルビュジエ財団、およびシャルロット・ペリアン財団に保管されている関連資料から判明もしくは推測できるル・コルビュジエとペリアンの共同事例によると、ペリアンのアトリエにおける役割は、4種類に大別できる（装置施工監督（図中：△）を除く）。

- 1) 装備要素の研究（図中：○）
  - 1') 共同署名装備要素のペリアンによる単独使用（図中：(○)）
  - 1'') 共同署名装備要素のル・コルビュジエによる単独使用（図中：(●)）
- 2) 装備要素の空間配置の検討（図中：◎）
- 3) 装備要素を含めた建築物全体の基本計画の構想（図中：□）

アトリエ在籍時、ペリアンは装備要素の開発や改良の研究だけではなく、その空間配置を含めて検討している場合が多い。アトリエ退所後は、定められた空間配置にル・コルビュジエの依頼でペリアンが装備要素を改良するケースが多く、ル・コルビュジエとペリアンが共同署名した「装備」の要素<sup>5</sup>を互いの事業において許可の上で（あるいは無許可で）自らの構想に取り込んでいることもある。ル・コ

表1 シャルロット・ペリアンとル・コルビュジエの共同形式

年代	作品（*はLCとの協働）	共同形式の種類	装備要素
1928	Équipement de la villa La Roche (1928)*	○	照明・棚・卓・(椅子)・寝台
	Équipement de la villa Church (1928)*	◎	棚・卓・椅子
	Équipement de la villa Savoye (-1931)*	○	照明
	La maisons Loucheur (1929)*	◎	間仕切・窓・棚・浴室・台所
	La Cellule de 14 mètres carrés par habitant (-1930)*	◎	間仕切・棚・卓・椅子・浴室・台所
1929	Unéquipement intérieur d'une habitation (Salon d'automne)*	◎	棚・卓・椅子・寝台・浴室・台所
	Équipement de La Cité du refuge de l'Armée du Salut (-1933)*	◎	照明・棚・卓・椅子・寝台
1930	Villa Martinez de Hoz*	◎	棚・寝台
	Équipement de Le Pavillon suisse à la cité universitaire (1931-1933)*	○	間仕切・棚・寝台
	Pavillon d'aviation STAR *	□	ガラス壁
	Appartement de Jean Rivier à Paris (-1932)	(○)	棚・卓（+卓上照明）・椅子
	Stand Venesta (International Building Trade Exhibition, Londres)*	◎	柱・衝立・卓（+卓上照明）・椅子
1931	Équipement de Limmeuble rue Nungesser-et-Coli à Paris (-1934)*	◎	棚・卓・椅子・寝台・浴室・台所
	Pied de nez à l'avant-garde allemande*	◎	棚・卓・椅子
1933	Des maisons avec brise-soleil pour Barcelone*	□	ガラス壁（ブリーズ・ソレイユ）・間仕切・棚・卓・椅子・浴室・台所
1934	Ferme et village radieux (ré organisation agraire)*	◎	間仕切・窓・棚・卓・椅子・浴室・台所
	maison de week-end (Henfel), La Celle-Saint-Cloud, 1934	(●)	卓・棚
	Centrosoyous, 1934 (1928-)	△	
1935	La Maison du jeune homme (Exposition universelle de Bruxelles)*	◎	衝立・棚・卓・椅子・寝台・浴室・台所
1936	Expo. 1937 -Pavillon des Temps Nouveaux*	△	
	Aménagement de boutique Bat'a*	○	棚・椅子・寝台
1937	Cabine sanitaire préfabriquée (pavillon de l'UAM, Exposition)*	○	浴室（便所）
1939	Les écoles volantes*	□	寝台
1941	Selection, Tradition, Creation*	(○)	棚・卓・椅子
1945	The Unité d'habitation of Marseille (1947-1949)*	○	間仕切・棚・卓・椅子・台所
1953	The Maison du Brésil at the Citéuniversitaire, Paris (1959)*	○	棚・卓・椅子・寝台・浴室・台所
1955	The Art of Dwelling and the Synthesis of the Arts, Avatars of the Exhibition*	(○)	棚・卓・椅子
1963	Pavillon d'exposition ZHLC (Maison de l'Homme)	(●)	棚・卓・椅子
1964	Ambassade de France, Brasilia	(●)	棚・卓・椅子

ル・ブルジョアとペリアンの相互承認であり、両者の直接的・間接的共同はほとんど生涯にわたって続いていたことが分かる。もちろんペリアン自身、アトリエ在籍時より生涯にわたってル・ブルジョアの構想について言及している。しかしアトリエ在籍時には、「装備」という概念に言及することはない。むしろアトリエを退所し、日本に滞在してから「装備」を論じている<sup>6</sup>。アトリエ在籍、日本滞在、離日後のパリでの諸活動を経るペリアンの「装備」は、おそらくル・ブルジョアにおける「装備」と必ずしも同一ではないはずである。

ペリアンの研究については全体像を把握するための準備的研究段階にあり、すでに歴史的評価の定まったル・ブルジョアとの関係においてペリアンの果たした役割が少なくなかったことが具体的に指摘されている<sup>7</sup>。その一方において、近年ではジェンダー論の高まりに呼応して女性という切り口からペリアンの職能に論考した研究もあり、女性の観点から見た建築的課題が抽出されつつある<sup>8</sup>。あるいは、日本における「民藝」との接触に着目した研究が国内にはある<sup>9</sup>。しかしながら、建築構想過程や経年的変化に踏み込んで両者の相互作用を検証している研究はない。一方で近年、ペリアンの歴史的再評価も進みつつある<sup>10</sup>。本稿は、ル・ブルジョアの師であったオーギュスト・ペレからペリアンまで、一連の流れの中で「装飾」の20世紀的変容を考察する一環であり<sup>11</sup>、ペリアンが実質的に関与したと考えられるル・ブルジョアの「装備」の構想を抽出し、具体的な制作事例の分析を通して、両者の相互の関連性について考察する。

まず、ル・ブルジョアの構想においてペリアンの具体的な検討要素を「装備」に関わる基本要素、「椅子・卓・棚」（第2章）と「装備」から派生して検討された要素（第3章）に弁別し、各々の要素を経年的に分析することによって、両者の相互作用の変化の過程を明らかにする。

## 2. 「装備」の基本要素

### 2-1. 椅子の身体呼応性

1925年のレスプリ・ヌーヴォー館の展示において、ル・ブルジョアは椅子だけは「装備」可能な「オブジェ＝型」としてトーネット、ロベール・メイ、マーブル社の代表的な椅子の既製品を身体動作の標準的な「オブジェ＝型」として選択していた。ル・ブルジョアはとりわけ椅子の座り方の様々な身体動作の研究を始めるのは、ペリアン入所直前、1927年になってからである<sup>12</sup>

ペリアンの「屋根裏のバー」（1927）の展示がル・ブルジョアのアトリエ入所の契機となり、入所初期の段階から、ペリアンは工業素材を用いた鋼管家具、とりわけ椅子の研究という課題をル・ブルジョアからはじめに与えられた<sup>13</sup>。

ペリアンの素描は、ル・コルビュジエが素描した椅子の身体姿勢<sup>14</sup>に呼応して形を与えていくペリアンの様々な検討を示している。座面が滑る長椅子(「シェーズ・ロング」)、座板と背板が可動する肘掛け椅子がペリアン自身の手によって試作品が製作されて実現される(図1)<sup>15</sup>。ル・コルビュジエの身体動作に関する素描は既製品の椅子を土台にしているが、ペリアンの研究では鋼管の骨組みと座面との分節が明瞭であり、それゆえに身体動作に応じてわずかに可動する機構を備えることも可能になっている。ル・コルビュジエの動作研究以上に身体の自由な動作の可能性の追求の結果である。

これらの椅子は量産を意図し、様々な場所での使用を想定していた。最初はラ・ロッシュ邸の絵画ギャラリーの改修(1927)に際して適用されている。チャーチ邸(1928)の書斎に設置された椅子も同様である。ル・コルビュジエはこれらの椅子を慎重に置いた写真を撮影し、自らの作品の一部として取り込む(図2)<sup>16</sup>。

ル・コルビュジエの素描した椅子のなかには、ペリアンがすでに独自に研究し、後にル・コルビュジエとの共同署名となったことが明白な椅子もある<sup>17</sup>。サン＝シュルピスの自邸の食堂(1927)のためにペリアンが研究した回転椅子 *fauteil pivotant*(図3)<sup>18</sup>であり、チャーチ邸(1928)の食堂の室内装備としてそれを改良して用いている<sup>19</sup>。

金属の素材の可塑性を利用して身体に呼応する椅子を探究する一方で、やや遅れてペリアンは木製椅子も検討するようになる。

スイス学生会館(1933)の椅子については、ペリアンによって選ばれた藁を巻いた木製の既成椅子が金属製椅子と同様に併置され、ル・コルビュジエはそれを承認している<sup>20</sup>。それは、予算不足の問題から生じた既製品の選択であったが、「輝く農村」(1934)の太い脚を持つ木製椅子<sup>21</sup>は、農村的なものと機械的都市的なものの融合した新しい近代の世界観の一部を造形的に表現する椅子として、ルシュール型住宅(1929)の研究でも素描されている<sup>22</sup>。青年の家(1935)の展示においても、ペリアンは藁を巻いた木製椅子と回転椅子の併置をル・コルビュジエに提案しているが<sup>23</sup>、「輝く農村」の研究にいち早く取り組んでいたル・コルビュジエとの思想的共鳴と考えることもできる。

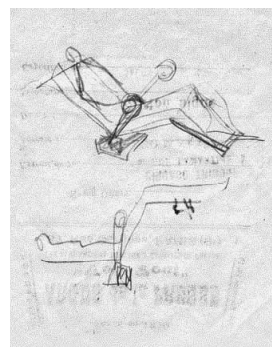
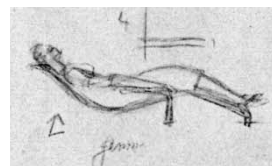


図1 ル・コルビュジエによる長椅子の素描(上)に基づくペリアンの検討



図2 チャーチ邸(1928)における書斎の室内装備の演出

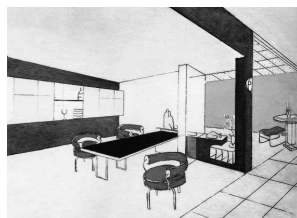


図3 ペリアンによるサン＝シュルピスの自邸の食堂(1927)の素描

寝台もまた、長椅子「シェーズ・ロング」の研究の延長としてペリアンが独自に研究し、ル・コルビュジエと共有されていく。パリの救世軍難民センター（1933）において、低予算のために、装備される家具の多くが既製品の改良や「椅子・卓・棚」の安価な金属素材の骨組みへの切り替えであるが、とりわけ金属チューブとキャンバス生地のマットレスによる簡易二段寝台<sup>24</sup>は、ヴォリューム感のある鋼管家具とは異なるが、ル・コルビュジエのアパルトマン（1931）における夫婦の寝台としてル・コルビュジエは採用している<sup>25</sup>。

ル・コルビュジエのアトリエを離れてからのペリアンは、金属製椅子以上に木製椅子の可能性を追求していく。簡易寝台に関しても、「一般的予算の居間」（1936）やビヴュアクの避難小屋（1937）<sup>26</sup>の仮設山小屋の実験的建設事業において独自に追求し<sup>27</sup>、素材と身体への応答性を多様に研究している。

その一方でル・コルビュジエは、ペリアンとの共同である金属製椅子を含めて「オブジェ＝型」を選択し続けている。住宅構想が年を追うごとに減っていくことにも増して、椅子としての完成度をル・コルビュジエはそこに認めている。

## 2-2. 卓の重厚性

レスプリ・ヌーヴォー館の卓は金属製であるが、素朴な木製卓のような形状であり、天板の四方角を4本の脚で支えている。ラ・ロッシュ邸のギャラリーの1925年3月竣工時には卓は想定されていなかったが、1927年の絵画ギャラリー再整備における固定卓の装備は、建築家の意図に反した物品が置かれることを回避するル・コルビュジエの意図があったのかもしれない<sup>28</sup>。ル・コルビュジエは平面上の設置位置を検討しているが<sup>29</sup>、天板を分節するV型の鋼管脚を用いたのはペリアンである<sup>30</sup>。



図4 ペリアンによるスイス学生会館（1933）のロビーの卓と木製椅子

その後のチャーチ邸（1928）の食堂の鋼管卓は、ペリアンによる回転椅子同様、ペリアンの自邸となったサン＝シュルピスの食卓に出自がある<sup>31</sup>。鋼管の椅子と同じ素材で4つの鋼管脚によって金属天板を支える形式であるが、天板の四方角をはずした支脚によって天板と支柱の分節は明瞭である<sup>32</sup>。

同様の手法は、サロン・ドートンヌの展示（1929）頃まで繰り返し検討されていたが、スイス学生会館（1933）のロビー中央の卓においては、大理石の天板をより厚く、脚をより太くして、重厚性を演出している（図4）<sup>33</sup>。岩や鉱物の拡大写真をコラージュしたル・コルビュジエの写真壁画と一体となるようにしたペリアンの解釈であるが<sup>34</sup>、ル・コルビュジエのアパルト

マン（1931）においても同じ手法を用いたペリアンの食卓をル・コルビュジエは採用している<sup>35</sup>。ペリアンがほとんど関与していない週末住宅（1934）においても、ル・コルビュジエは低いヴォールト屋根の下にペリアンが検討した同様の大理石天板と金属脚の食卓を採用している。

ル・コルビュジエのアトリエを退所後のペリアンは、金属製の卓を追求することはない。むしろ、母のための農家（1939）の木製食卓の天板や脚のように<sup>36</sup>、木製素材の特性と精神的な満足を一致させる「有用な形態 forme utile」<sup>37</sup>としての可能性を追求していく。ただし、卓の中心的な課題が食卓であることは、アトリエ在籍時から一貫している。ル・コルビュジエ以上に、ペリアンにとって食卓はサン＝シュルピスの食卓（1927）以来の重要な主題であり続けていることが分かる。

一方、ル・コルビュジエが卓そのものの造形可能性を追求することはない、むしろ壁への備え付けを追求していく。ジャウル邸（1951）における折り畳み卓などはその典型である<sup>38</sup>。

### 2-3. 棚の可動性

ペリアンのアトリエ入所後の研究の中心は椅子と卓であり、入所以前から自ら主体的に取り組んでいた課題である。一方、装備のもう一つの基本要素である「棚」は、ペリアンにとって新しい主題となり、レスプリ・ヌーヴォー館の「装備」の発想を取り入れて発展的に研究を進めることになった。

ペリアンはまず、「棚」の規格化を一層進め、  
矩形に細分化した棚の単位を様々に組み合わせる技術を研究している<sup>39</sup>。ル・コルビュジエは「棚」の設置手法を「壁沿い」「間仕切壁として独立」「壁への組み込み」に整理する一方<sup>40</sup>、ペリアンは棚の「壁への組み込み」を積極的に追求することはない。サロン・ドートンヌの展示（1929）において、組み合わせた棚を「スクリーン écran」<sup>41</sup>としての間仕切壁としたり、壁面に据え置いたりしている<sup>42</sup>。ホズ邸（1930）の構想においても、ル・コルビュジエはペリアンに室内空間の装備を任せているが、寝室と居間を仕切る棚がサロン・ドートンヌの展示（1929）よりも一段と低く、ル・コルビュジエの諸住宅作品と比較してより開放的な視覚の広がりがつくられている（図5）<sup>43</sup>。ル・コルビュジエのアパルトマン（1931）においても、室内装備を一人で担当したペリアンは、サロン・ドートンヌの展示（1929）と同様の「棚」の空間構成手法を用いて、規格化された棚が空間を緩やかに仕切っている<sup>44</sup>。

その後、ペリアンは主導した青年の家（1935）の展示においては、壁に棚板だけを組み込

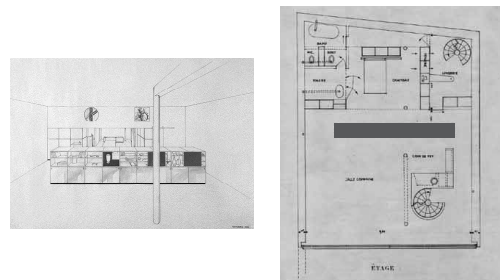


図5 マルチネス邸（1930）の居間と寝室を柔らかく分節するペリアンによる棚（平面図における網掛け部分）の空間配置

む実験が試みられている<sup>45</sup>。「一般的予算の居間」(1936)の提案においては、さらに壁に吊り下げられ、浮遊するかのような中空の棚が設置されている<sup>46</sup>。「棚」という概念を解体するような壁の制限から解放されたペリアンの棚の研究は、棚扉の研究に遡る。

ラ・ロッシュ邸のギャラリー改修(1927)における引戸棚<sup>47</sup>手法は、チャーチ邸(1928)における遮蔽された書棚の検討につながっていく(図2)。はじめペリアンはレスプリ・ヌーヴォー館(1925)の「棚」と同様の手法を用いて書物を露出する書棚を研究していたが<sup>48</sup>、再度ペリアンが提案して施主に承認されたのは、壁全体を覆うような引戸棚であった<sup>49</sup>。

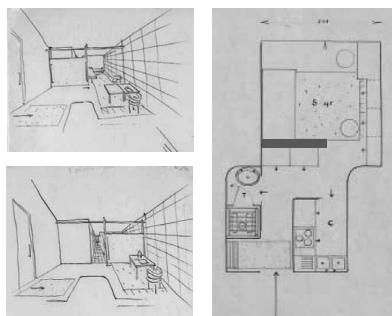


図6 ペリアンによる14平米の居室(1930)の引戸(平面図における網掛け部分)の開閉による空間的可変性の研究

その後のルシュール型住宅(1929)の研究においても、ペリアンは引戸棚の規格化の検討を続けているが<sup>50</sup>、居室構成の類型を検討する過程において、さらに大胆に間仕切壁としての引戸を研究している<sup>51</sup>。実質的にペリアンが単独で研究した14平米の居室(1930)の研究において、ペリアンはルシュール型住宅(1929)の研究の延長として、こども部屋の融通性を得るために引戸間仕切壁を自らの着想で主題的に研究している(図6)<sup>52</sup>。ル・コルビュジエが単著の14平米の居室研究報告書<sup>53</sup>は、草稿の図版と説明文はペリアンが起草したものであり<sup>54</sup>、ペリアンは室的可変方法を体系化していったことが分かる<sup>55</sup>。

アトリエ退所後のペリアンは、「雲 nuage」と名付けられた可変的な棚の装備をはじめ<sup>56</sup>、引戸や自立型の棚を含めて空間の開放性や可変性を多様に研究していく。

ペリアンが関わっていないル・コルビュジエによる構想のなかでは、吊下棚の装備はル・マンドロ夫人の住宅(1929)<sup>57</sup>など散発的であり、ペリアンがアトリエ退所後のル・コルビュジエの棚の研究は、壁への備え付けの重要性が増してくる<sup>58</sup>。

その傾向は、ペリアン在籍時から明白である。ル・コルビュジエのアパルトマン(1931)の事業過程において、ペリアンの間仕切壁として設置した棚は、最終的にル・コルビュジエによってすべて収納棚として壁に寄せられ、白色の平滑な壁面に隠される<sup>59</sup>。

### 3. 「装備」の拡張要素

#### 3-1. 照明機器

1920年代以降、ル・コルビュジエの建築作品における照明機器は、壁付きもしくは天井付きの裸電球であり、資料として残されている写真などでは「グラス」の既製品ランプを選択し続けている<sup>60</sup>。ペリアンは家具担当を期待されて1927年にル・コルビュジエのアトリエに



入所したが、天井からの吊り下げ裸電球についてラ・ロッシュの苦情<sup>61</sup>があり、ペリアンがギャラリーの間接天井照明を検討することになった。ペリアン自身はこの照明機器について多くを語っていないが、展示絵画の壁上部に三角形断面の金属板の覆いを用いた細長い間接照明をほぼ単独で検討している<sup>62</sup>。サヴォア邸（1931）における居間の金属板の覆いを用いた天井吊り下げの間接照明もまた、ペリアンによるものと推測されているが<sup>63</sup>、これらの照明機器にはピエール・ジャンヌレをはじめ複数の所員が関わり、ペリアンの役割は定かではない。その後、ル・コルビュジエのアパルトマン（1931）の「雫」状の覆いを用いた食卓の照明<sup>64</sup>にもペリアンが関わっているとされるが<sup>65</sup>、資料に乏しい。

アトリエ退所後のペリアンは、一部の店舗改修事業を除けば、照明機器を主題的に研究することは少なく、メリベルの山荘（1946-48）においてラ・ロッシュ邸やサヴォア邸（1931）と同型の照明機器を応用した装備を検討している（図7）<sup>66</sup>。彫刻的断面を持つ照明機器はなく、むしろ天井面に組み込むことが多い<sup>67</sup>。

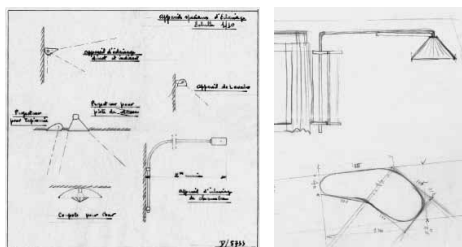


図7 メリベル山荘（1946-48）の照明機器設置に関するペリアンの素描

ペリアン退所後の第二次世界大戦後、ル・コルビュジエはカバノン（1957）、マルセイユのユニテ・ダビタシオン（1952）の構想において数多くの独立設置型の人工照明を手がけ、「雫」の覆いを変形したものが多いが<sup>68</sup>、彫刻的形状の覆いも新たに構想されている<sup>69</sup>。

### 3-2. 衛生設備

ルシュール型住宅（1929）の衛生機器（台所、風呂、トイレ）の規格化の研究は、ペリアンがアトリエで最初に携わった衛生機器と推測されている<sup>70</sup>。ル・コルビュジエによる台所の機能性と風呂・トイレの集約化そのものは、すでにペリアン入所以前の最小限住居（1926）の研究の延長線上にあり、さまざまな所員が関わっていたためにペリアンの寄与の詳細を同定することはできない。ペリアンが中心的な役割を果たしたサロン・ドートンヌの展示（1929）においても、風呂・トイレの集約化は検討されていない<sup>71</sup>。

衛生設備がペリアンによって主題的に研究されるのは、バルセロナの労働者住宅群（1933）の研究である。ペリアンは細長い平面計画に合わせて、台所を含め風呂・トイレのすべての水回り設備の中央配置を検討している<sup>72</sup>。トイレや風呂を一体化した14平米の居室（1928）以上に集約的でありながら、台所のカウンターによって解放的に諸室を分けている。

アトリエ退所後、ペリアンはル・コルビュジエから台所施設を「女性の感性によって」マルセイユのユニテ・ダビタシオン（1952）の住居単位の再検討するよう依頼される<sup>73</sup>。ル・コ

ル・ブルジョエはすでに規格化した集約的な台所を検討していたが<sup>74</sup>, ペリアンは規格化された棚を家事動線に即して機能的に再配置すると同時に、食堂とつながる側面の上部を開放して対面できるカウンター形式を採用している(図8)<sup>75</sup>。この「台所=バー cuisine-bar」<sup>76</sup>は、辿ればサン=シュルピスの自邸の食堂(1927)と同じ形式であり、アトリエでの衛生機器研究を発展させる空間的な図式となっていたことが分かる。

ル・ブルジョエのアパルトマン(1931)にも同形式が認められるが、ル・ブルジョエの要請によって間仕切り壁で台所の空間は閉じられているように、ル・ブルジョエが台所の開放性を主題化することはない<sup>77</sup>。

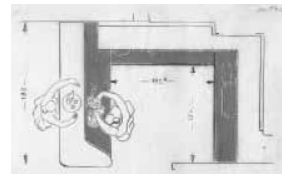
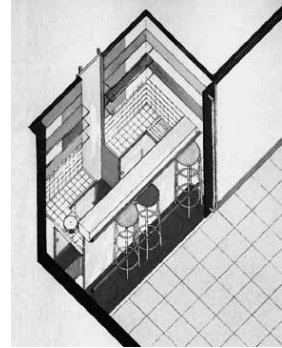


図8 ペリアンによる「仕事とスポーツ」(1927)の展示空間におけるカウンター(上)とマルセイユのユニテ。ダビタシオンの「台所=バー」(下)

#### 4. おわりに

表2:「装備」におけるル・ブルジョエとシャルロット・ペリアンの共通性と差異

	ル・ブルジョエ	シャルロット・ペリアン
	工業素材の可塑性と自然素材特性	
椅子	「オブジェ=型」	素材と身体への呼応性
卓	壁面への一体化	食卓の重厚性
空間構成	壁面への一体化	室の変容性
照明機器	彫刻的オブジェ	天井への組込み
衛生設備	衛生機器の集約化	台所の開放性
	空間構成の要素としての「装備」	身体動作の「装備」

シャルロット・ペリアンとル・ブルジョエの共同における制作的な共通性や差異は、表2として整理することができる。

「装備」はル・ブルジョエによる概念であり、ペリアンにははじめそのような発想がなかったことはたしかである。しかしペリアンによる「装備」の研究は、単に「ル・ブルジョエの解釈」<sup>78</sup>ではなかった。ル・ブルジョエとペリアンの多様な共同を通して分かるのは、ペリアン自身の発想に「装備」と同じ種を持っていたということである。だからこそ、ル・ブルジョエのアトリエ在籍時には「装備」という言葉を論文で使わなかったのである。

回転椅子をはじめとする装備の基本要素の出自のいくつかがペリアンにあったことは言う

までもなく、身体と呼応する工業素材の可塑性や自然素材の特性などはどちらかの影響というよりも、両者がそれぞれ独自に関心を抱いていた主題である。ル・コルビュジェの指示によるペリアンの具体化、あるいはペリアンの萌芽的発想のル・コルビュジェの明確化というよりもむしろ、両者に共通する発想の共鳴性、双方向性が明らかである。

しかしながら、椅子の可動性、大理石の卓、引戸による壁の開放、衛生機器の集約化など、ペリアンとル・コルビュジェの共同における差異も明らかであり、ペリアンの退所後はそれが顕著になっていく。「台所=バー」はその典型の一つである。

空間における身体動作の可能性という基本的な「装備」の考え方を共有しつつも、このような差異があるからこそル・コルビュジェは退所したペリアンに対して共同者としての協力を要請したのである。ル・コルビュジェはブラジル館（1953）において、すべての方針を定めた後にペリアンに内装の詳細検討と現場管理を要請しているが、ル・コルビュジェは竣工後、自らの構想の忠実な再現を超えたペリアンの業績を認めざるを得なかった<sup>79</sup>。

ル・コルビュジェによる壁に組み込まれた棚、あるいは彫刻的な照明など、比較的体との関連が希薄な装備要素については、ペリアンはさほど関心を示していない。ル・コルビュジェにおいて「装備」がつねに空間構成という次元において研究されるとすれば、ペリアンは比較的体動作という次元で研究が続けられることになるのであり、両者の共同はその意味では、身体・空間の振幅において成立していたと考えることができる。

#### 註

- 1 アンドレ・ヴォジャンスキー、ウラディミール・ボディアンスキー、アンドレ・メゾニエ、ヤニス・クセナキス、ロジェ・オジャムなどの所員は、書物や全集などを通してル・コルビュジェは名を挙げている。しかし一方、たとえばアルフレッド・ロスにはペリアンの入所以前から鋼管家具の研究に関わっているが、ル・コルビュジェが公の場で言及することはない。
- 2 ペリアンの自伝や書簡文書から判断して、ピエール・ジャンヌレの役割は、多くの場合技術的な助力、アトリエの組織運営であり、ピエール・ジャンヌレによる独自の考えがル・コルビュジェの建築制作理念に影響を与えた影響は顕著には認められない。
- 3 cf., Le Corbusier, *L'art décoratif d'aujourd'hui*, G. Crès et Cie, Paris, 1925, p.76.
- 4 ル・コルビュジェは「室内装飾の建築家」としてペリアンの職能を複合的に定義している。cf., E2-18-350, certificate de le Corbusier, 1932.3.17.
- 5 ル・コルビュジェ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアンの三名で特許が申請されたのは、長椅子「シェーズ・ロング」（1929）プレファブ衛生室（1937）である（AFLC, T2-6-192, 1929.4.8; AFLC; T2-6-205, 1937.11.27）。棚の引戸機構（1949）や引出機構（1947）などは、アトリエでの研究をペリアンが独自に改良発展させて特許申請されている。
- 6 cf., Shoichiro Sendai, 'The Conception of "Equipment" by Charlotte Perriand: Cross-over between Le Corbusier and Japan', *Journal of Asian Architecture and Building Engineering*,

- Architectural Institute of Japan, Architectural Institute of Korea, Architectural Society of China, vo.18, no.5, 2019.11, pp.430-438.
- 7 cf., Arthur Rüegg, *Le Corbusier, Meubles Intérieurs 1905-1965*, Verlag Scheidegger & Spiess, Zurich, 2012; Tim Benton, « Charlotte Perriand: les années Le Corbusier », Marie-Jeanne Dumont intro., *Charlotte Perriand*, Éditions du Centre Pompidou, Paris, 2005, pp.11-24; Gilles de Bure, Perriand/Gray destins croisés, *Beaux Arts Magazine*, décembre 2005, pp.66-70.
- 8 cf., Elise Koering, *Charlotte Perriand-Le Corbusier, étude d'une collaboration*, mémoire de maîtrise d'histoire de l'art, université Marc-Bloch, Strasbourg, octobre 1999; Mary McLeod, "Furniture and femininity", *The Architectural Review*, no.1079, 1987.1., pp.43-46; Mary McLeod ed., *Charlotte Perriand: an Art of Living*, Harry N. Abrams, Inc., New York, 2003, pp.36-37; Gladys Fabre, « Femme - architecture en modernité en mouvement », in Marie-Jeanne Dumont intro., *Charlotte Perriand*, Éditions du Centre Pompidou, Paris, 2005, pp.93-107; 愛知美奈子・赤坂喜顕, 「近代建築への女性性“Femininity”の影響に関する研究 リリー・ライヒ, アイノ・アアルト, シャルロット・ペリアンにおける創造的コラボレーションの軌跡を通じて」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018年9月, pp.423-424
- 9 cf., 和田菜穂子, 「シャルロット・ペリアンと東北民藝」, 家具道具室内史:家具道具室内史学会誌 (13), 2021-07, pp.114-137
- 10 cf., sous la direction de Sébastien Cherruet et Jacques Barsac, *Le Monde nouveau de Charlotte Perriand*, Éditions Gallimard, Paris, 2019.
- 11 cf., Shoichiro Sendai, 'The Conception of "Equipment" by Charlotte Perriand: Cross-over between Le Corbusier and Japan', *Journal of Asian Architecture and Building Engineering*, vo.18, no.5, 2019.11, pp.430-438; 千代章一郎, 「オーギュスト・ペレの「瓶」とル・コルビュジェの「装備」による室内装飾「動かせる家具」と「動かせない家具」」, 日本建築学会計画系論文集, 第87巻, 第792号, 2022年2月, pp.432-441
- 12 ヴァイセンホフの実験都市の二住宅(1927)の建設事業を契機とした研究である。この建設事業を通して、バウハウスの住宅作品や室内装飾を見ているが、ル・コルビュジェ自身は直接的には言及しない。マルセル・ブロイヤーの家具をいち早く採用したのはロベール・マレ＝ステヴァンスであるが、ル・コルビュジェはヴァイセンホフにおいても鋼管椅子は用いず、やはりトーネットの曲げ椅子やマーブル社の肘掛け椅子を採用している。
- ペリアンの入所はヴァイセンホフの直後であり、現地視察もしているが、ブロイヤーなどの椅子との形態的類似があるにも関わらず、自伝においても印象を記していない。ペリアンはバウハウスの機能主義には賛同しているが (cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit, p.32), 後には素材への感性, 肌触りへのバウハウスの無関心を批判するようになる (*ibid.*, p.156)。しかしそれこそが、バウハウス門下の山脇巖らのペリアンへの批判点であった (「ペリアン女史創作展について聴く1」, 工藝ニュース, 10 (5), 1941, p.189)。
- 13 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.26. なかでもペリアンが最初に着手したのは椅子であった。
- 14 cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, W. Boesiger et O. Stonorov éd., *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1937, p.157.
- 15 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.78, p.90; [Charlotte Perriand], FLC19357; [Charlotte Perriand],

- FLC19355; [Charlotte Perriand], FLC19354. 図版出典：Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.78.
- 16 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, pp.117-119. 図版出典：Le Corbusier et Pierre Jeanneret, W. Boesiger et O. Stonorov éd., *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1937, p.203.
- 17 偶然の一致かどうかは不明であるが、回転椅子に限らず、ル・コルビュジエとペリアンの共同以前の両者の椅子の素描に形態的な類似が指摘されている。cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., p.75.
- 18 図版出典：Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.54.
- 19 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.108; [Charlotte Perriand], FLC11119; [Charlotte Perriand], FLC33551. 回転椅子の可動性はバチャの店舗（1936）においてペリアンは折り畳みの寝台として検討している。cf., [Charlotte Perriand], FLC17894.
- 20 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.52.
- 21 cf., [Le Corbusier], FLC28619A.
- 22 cf., [Le Corbusier], FLC18253.
- 23 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.83.
- 24 cf., [Charlotte Perriand], FLC11345. 二段寝台は実質的にペリアンが単独で研究した 14 平米の居室（1928）の構想にある。cf., AFLC, B2-12-297, 299, 305; AChP, 29 100, 30 049, 29 139.
- 25 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.56.
- 26 cf., AChP36014, AChP36013.
- 27 cf., AChP 36014, 36 013.
- 28 cf., AFLC, P5-1-208, lettre de Jeanneret à Ozanfant, 1925.4.16.
- 29 cf., [Le Corbusier], FLC15258.
- 30 cf., [Charlotte Perriand], FLC15259; [Charlotte Perriand], FLC15261; [Charlotte Perriand], FLC15235.
- 31 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., p.54.
- 32 cf., *ibid.*, p.95, FLC11119, FLC 33551.
- 33 cf., AChP 33 012. 図版出典：OCChP1, p.219.
- 34 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.53.
- 35 cf., Arthur Rüegg, *op.cit.*, p.308, AChP30 219, AChP 50 406.
- 36 cf., AChP39005.
- 37 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 2 1940-1955*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2015, p.252.
- 38 cf., Michel, FLC10135C.
- 39 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., pp.138-140; [Charlotte Perriand], FLC19472, 1929.7.4.
- 40 cf., Le Corbusier, *Précision sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme*, G. Crès et Cie, Paris, 1930, p.115.
- 41 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.37.

- 42 cf., Charlotte Perriand, FLC23106C.
- 43 cf., AChP30 013, AChP 30 018, AChP 30 001, AChP 30 026. 図版出典：Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014., p.189. + p.184
- 44 cf., [Charlotte Perriand], FLC13352; [Charlotte Perriand], FLC13354; [Charlotte Perriand], FLC 13574; [Charlotte Perriand], FLC 13549.
- 45 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.75.
- 46 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., p.355.
- 47 cf., [Charlotte Perriand], FLC15242~[Charlotte Perriand], FLC15252.
- 48 cf., [Charlotte Perriand], FLC31464.
- 49 cf., [Charlotte Perriand], FLC31463; FLC8194.
- 50 cf., FLC19377; FLC18238.
- 51 cf., AFLC, J1-6-13, J1-6-31. 共有室1室に対する個室の数の変更の検討。引戸間仕切の起源については、ル・コルビュジエはヴァイセンホフの実験都市の二住宅（1927）の棚に組み込まれた引出寝台としている（cf., Le Corbusier, *La ville radieuse*, Les Éditions Vincent, Fréal & Cie, Paris, 1935, pp.143-146. 14 平米の居室（1930）におけるル・コルビュジエの草稿）。しかしこれは事後的な認識であり、当時在籍していた前川國男による障子の着想とも指摘される（cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., p.122）。
- 52 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.60; AChP29 140, AChP 30 049, AChP 29 077, AChP 29096, AChP 29139, AChP 29042. 図版出展：Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.130. + p.131
- 53 cf., Le Corbusier, *La ville radieuse*, op.cit., pp.143-146.
- 54 cf., AFLC, B2-12-297, 299, 305.
- 55 空間の開放性は、室内の暑湿の関係性だけではなく、外壁との関係についても同様である。航空館（1930）はペリアンが案全体をル・コルビュジエから任された数少ない事業であり、ペリアンは規格化された金属の棚を積み上げるように全体を構成して全体を透明なガラス壁としているが（cf., FLC33460, FLC3346033455.）、ファサードの均一性をル・コルビュジエは否定する（cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.33）。
- ペリアンが関わった外壁の検討は、バルセロナの労働者住宅群（1933）の研究である。後にル・コルビュジエの「ブリーズ＝ソレイユ *brise-soleil*」の日除け装置の原型であるが（cf., [Charlotte Perriand], FLC13223; [Charlotte Perriand], FLC11601C; [Charlotte Perriand], FLC11601E.）、ペリアンが日除け装置を追求することは、ブラザヴィルのエール・フランス集合住宅（1952）以外なかった。
- 56 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 3 1956-1968*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2017, pp.24-27.
- 57 cf., FLC28892.
- 58 cf., Shoichiro Sendai, Realization of the Standard Cabinet as “Equipment” by Le Corbusier: The transformation of the “Wall”, *Japan Architectural Review*, Volume2, Issue 4, October 2019, pp.494-506.
- 59 cf., FLC13563. ペリアンは棚配置の根本的変更について触れていない。
- 60 cf., Didier Teissonnière, *Le Corbusier et la lampe Gras*, Éditions Norma, Paris, 2015.

- 61 cf., AFLC, P5-1-285, lettre de La Roche à Jeanneret, 1925.8.16.
- 62 cf., [Charlotte Perriand], FLC15228; [Charlotte Perriand], FLC15252; [Charlotte Perriand], FLC15253; [Charlotte Perriand], FLC15284; [Charlotte Perriand], FLC15296.
- 63 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., p.120.
- 64 cf., AFLC, Carnet blue, T71.
- 65 cf., Arthur Rüegg, *op.cit.*, p.309.
- 66 cf., cf., AChP46 012. 図版出展 : Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 2 1940-1955*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2015, p.151.
- 67 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 3 1956-1968*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2017, p.464.
- 68 cf., Arthur Rüegg, *op.cit.*, pp.328-329.
- 69 cf., *ibid.*, pp.325-329.
- 70 cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 1 1903-1940*, op.cit., pp.122-125.
- 71 cf., Charlotte Perriand, FLC23106C.
- 72 cf., [Charlotte Perriand], FLC11601D; [Charlotte Perriand], FLC 13178.
- 73 cf., AFLC, E2-18-230, lettre de Le Corbusier à Perriand, 1946.5.2.
- 74 1945年の初期案については, cf., [Le Corbusier], FLC20152; [Le Corbusier], FLC20153.
- 75 cf., FLC26388, 1947.5.28; FLC26389A, 1947.5.28; FLC26387A, 1947.5.28; AChP50 444, AChP47 002, AChP47 004, AChP47 003. 図版出展 : Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, L'Œuvre complète, Volume 2 1940-1955*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2015, p.214.
- 76 cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, op.cit., p.249.
- 77 ペリアンは衛生機器そのものについても研究し, トイレの衛生室(1937)ではピエール・ジャンヌレとペリアンが共同して研究した量産設備として便器と手洗いの衛生機器を提案して特許を申請している。cf., cf., brevet d'invention, n°825279, 1937.8.6. 研究の成果はとりわけペリアンが主題的に追及していた山岳避難施設の構想, トリトリアノン(1937)やサハラの家(1957)などで継続的に装備されている。
- 78 ユニテ・ダビタシオン(1952)の室内装備について, ペリアンの室内装備を「ル・コルビュジェの解釈」とみなすル・コルビュジェに対して, ペリアンは拒否している(AFLC, O2-12-28, lettre de Perriand à Le Corbusier, 1950.3.25)。
- 79 cf., AFLC, K1-15-159, lettre de Le Corbusier à Perriand, 1959.6.25.

# The Collaboration between Le Corbusier and Charlotte Perriand in the Realisation of the Concept of “Equipment”

SENDAI, Shoichiro

This paper aims to discuss the collaboration between Charlotte Perriand (1903- 1999) and Le Corbusier (1887-1965) concerning the concept of “equipment” conceived by Le Corbusier as part of the study of “decoration” in the 20th century.

Perriand’s study of “equipment” in the atelier Le Corbusier was not merely “the interpretation of Le Corbusier.” Through the collaboration concerning equipment elements - chairs, tables, cabinets, as well as lighting and satellite equipment, Perriand’s own ideas became more obvious. It can even be said that some of the origins of the basic elements of equipment came from Perriand.

The plasticity of industrial materials that correspond to the body and the characteristics of natural materials are the subjects that both were interested in, rather than the influence of either one. However, Perriand’s uniqueness was developed by the studies, such as the dining table with a heavy top plate, the openness of the cabinets as a partition wall, and the opening of the kitchen.

If “equipment” was always studied in the dimension of spatial composition in Le Corbusier, Perriand continued to do it in the dimension of physical movement. It can be considered that the collaboration between the two was executed between the body and its space.